月刊みんぱく

2023年
2月号

昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283 令和5年2月1日発行 第47巻第2号通巻第545号

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

特集

授乳のいま・むかし

母乳は自然か？ 松尾瑞穂
胎毒と乳揉み 白井千晶
授乳したら親子 梅津綾子
罪人にならないように 諸昭喜

月刊みんぱく
2023年
2月号

目次

1 エッセイ　千字文
境噺
ワクサカ ソウヘイ

特集
授乳のいま・むかし

2 **母乳は自然か？**
――授乳から見る社会のかたち
松尾 瑞穂

4 **胎毒と乳揉み**
白井 千晶

6 **授乳したら親子**
――ナイジェリア、ハウサ社会の授乳文化
梅津 綾子

8 **罪人にならないように**
――韓国の搾乳器
諸 昭喜

10 みんぱく回遊
貝を捕る、藻を採る
金丸 雄一

12 みんぱくインフォメーション

14 ○○してみました世界のフィールド
ジンバブエで髪を切る
早川 真悠

16 コレクションあれこれ
博物遺産のデータベース
野林 厚志

18 シネ倶楽部 M
天賦の才能と
それを支えるチームの葛藤
――「マルジェラと私たち」「マルジェラが語る“マルタン・マルジェラ”」
松本 文子

20 ことばの迷い道
ハムりたいことばたち
岡田 真輝

21 編集後記・次号の予告

エッセイ
千字文

境噺（さかいばなし）

小学生の頃、ノックもしないでふわっと職員室に入ったら、担任の先生に無作法を窘（たしな）められた。

「あなたには、結界が見えないの？」

そうか、この世には自分の眼には映らない「境」のようなものがあるのだな、と初めて知った瞬間であった。

落語家は、噺を始める前に扇子を座布団の前に置く。あれは演者と客席との領域を暗に分ける結界である。なにが起きるかわからない臨場性に満ちているのが、生の舞台。もしかしたら客席から生卵が飛んできて、それの打ちどころが悪くて、演者は命を落としてしまうかもしれない。だからこそ境を作ることが重要で、あの扇子はいわばリスクマネジメントのためのものなのだ。「おあとがよろしいようで」と落語家が頭を下げるのも、終わりの結界を示すための所作であると見ていいかもしれない。

ワクサカ ソウヘイ

生まれて、そして死ぬ。私たちの旅路は、落語の一席とは違って境目がひどく曖昧なものである。母親の胎内でぬるりと命は灯（とも）され、そして大概は寿命や病魔によってそれはおぼろげに消えていく。いつの間にか始まって、礼もしないままに終わっていくなんて、まるで能の舞台のようだ。どこで拍手をしていいのか、わからない。扇子も置かれていないし、ノックするべき扉も見当たらない。

あまたの展示品に溢（あふ）れ返る「みんぱく」、その中でも私が特段に魅了されているのは、ルーマニアの「陽気な墓」だ。「この者は酒の飲み過ぎで死にましたっ！」「この者は姑（しゅうとめ）とのいざこざに悩まされていましたっ！」。そんな感じで故人の死因や生き様などがユーモラスかつカラフルに刻まれているそれは、私たちが日本で触れている陰鬱な質感の墓石とおよそ真逆の印象を放っている。「陽気な墓」を見るたび、ああ、自分もこういったものの下で眠りたい、という欲求に駆られる。

墓というのは、漠然とした生命のジャーニーに、はっきりと境目をもたらすアイテムだと思う。「この者はここで終わりましたっ！」という明確な句読点であり、標識なのだと思う。

酒が湧く泉のことを「酒井」と呼び、それはつまり「境」なのだ、という話を聞いたことがある。酒とは境に立つためのツールで、そして境とは「快楽」と「不安」の両義性を孕（はら）む。飲酒量によって酩酊（めいていかん）感を得たり、二日酔いに悩まされたり。境目での在り方が、グッドトリップもしくはバッドトリップを決定する。

ぬるっと始まったこの妙に長い旅がグッドトリップであることを願って、いつかルーマニアで自分のための「陽気な墓」を作りたい。自らに示した、眼に映る終わりの結界。それに接する直前まで、ゲラゲラ笑って生きていきたい。墓標に刻むのは、「この者は職員室にノックしないで入っていましたっ！」の文面である。おあとがよろしいようで。

プロフィール
文筆家。1983年東京都生まれ。ルポやコントをフィールドに執筆活動をおこなう。おもな著作に『出セイカツ記――衣食住という不安からの逃避行』（河出書房新社）、『ふざける力』（コアマガジン）、『今日もひとり、ディズニーランドで』（幻冬舎）、『夜の墓場で反省会』（東京ニュース通信社）などがある。

特集

授乳のいま・むかし

生まれた我が子に乳を与える母親の姿は母性の象徴としてとらえられがちだが、
残念ながらすべての女性が十分な乳が出るわけではない。
ヒトは粉ミルクを用い、乳母を頼み、神仏に祈願し、あるいは家畜の乳を飲ませたりしながら
子どもを育てている。本特集ではさまざまな授乳のあり方を見てみよう。

母乳は自然か？
——授乳から見る社会のかたち

松尾（まつお） 瑞穂（みずほ）
民博 超域フィールド科学研究部

生まれたばかりの動物の子どもがちゅうちゅうと乳を吸う姿を見て、哺乳類であれば「自然に」乳が出るものだと多くの人は思うかもしれない。しかし、現実はそうではない。残念ながら！

日本の厚生労働省の調査では、新生児を抱える母親の五三パーセントが、母乳が出ない、少ないという不安を抱えているという。産後の女性の精神状態が不安定になることは、「産後うつ」として知られているが、授乳をめぐる問題が、出産直後の不安にも大きな影響を与えているのだ。

母乳と自然主義

なぜ母乳が出る・出ないが、産後の母親に精神的不安をもたらすのだろうか？　もちろん、ホルモンバランスの崩れなど生理的な変化も大きいが、同時に、子どもは母乳で育てるのが「自然」な行為であり、母親の務めであるという文化的な規範があるからである。乳を与えるという行為には、赤ちゃんに栄養物を与えるという以上の社会的、文化的意味付けがなされている。今日の育児書でも、授乳中の母子間の肌のふれあいや、赤ちゃんとのアイコンタクトの重要性が説かれている。現代社会において授乳は、子どもの成長を促し、母子のつながりを強める母性の実践であるととらえられている。したがって、母乳が出ないのは母親失格だとして、自分を責めてしまう人も多いという。

母子保健政策が作る母乳主義

とはいえ、母乳の自然主義は時代や地域を超えて不変だったわけではない。七十年代の日本では、母乳ではなく粉ミルクなどの人工乳のほうが、栄養的にも医学的にも先進的だと考えられていた。確かに、母乳が出ない、量が少ない場合には、人工乳は子どもにとって救世主となりうる。しかし、人工乳のほうが母乳よりも栄養的にすぐれているといったイメージは、多くの母親が、乳が出るにもかかわらず、人工乳を買うという本末転倒の現象を引き起こした。

母乳が再び脚光を浴びるようになったのは、九十年代になってからである。母乳は赤ちゃんの免疫を強化する「完全食品」だという知識が広まり、国際的な母子保健政策でも推奨されるようになった。世界保健機関（WHO）やユニセフは、一九九〇年に母乳育児の支援の必要性を「イノチェンティ宣言」として発表し、生後一時間以内の授乳開始、六カ月の完全母乳育児、二年以上の母乳継続を推奨している。今では、多くの政府が母乳育児を推進している。

スリランカとインドの授乳

どれくらいの期間、赤ちゃんに乳を与えるのか、また、誰の・何の乳を与えるのかというのは、個人差とともに、文化的、社会的にも違いが見られる。往々にして、西洋社会では授乳期間は数カ月と短いのに対して、非西洋社会では長期にわたる傾向が強い。わたしが聞き取りをしたスリランカでは、基本的には次の子どもが生まれるまで飲ませ続けるというのが一般的で、なかには小学校に上がっても子どもに乳を飲ませていた人もいた。この場合は、授乳は母子間のコミュニケーションの役目を果たしているといえる。また、姉妹間や近隣女性からのもらい乳は見られるが、長期的に続けることはまれで、母親の乳の出が悪いときなどの一時的な措置だと考えられている。

一方で、お隣のインドでは、わたしが聞き取りをする限りではもらい乳の慣行はほとんどない。その理由として、母乳を介して与え手の性質が赤ちゃんに伝わると考えられていることや、母乳の与え手に赤ちゃんが愛着を感じてしまうといったことが挙げられている。特にカーストの区別が厳しいヒンドゥーの人びとにとっては、誰から乳をもらうのか、ということは重要な問題となる。そのため、他の人からもらい乳をするよりも、同じ家屋に居住する「家族」である山羊（やぎ）や牛といった家畜の乳が好まれる傾向にある。このように、授乳は単なる生理的現象なのではなく、社会・文化的な関係性のなかに取り込まれた実践であるといえるだろう。

左：コロンボのラクテーションセンターの様子。出産後はここで、マッサージや授乳指導を受ける
右：ラクテーションセンターで、生後数時間の新生児に初乳を与える母親（スリランカ、2019年）

スリランカの母子手帳。母乳から離乳食への移行について説明している（2018年）

左上：16世紀に建立された女神カマッキャ寺院の彫像。授乳をする母親と子ども（インド、アッサム州、2022年）
右上：レオナルド・ダ・ヴィンチ作（推定）《リッタの聖母》1490年ごろ エルミタージュ美術館蔵（出典：Wikimedia Commons）
中世期には授乳する聖母像は宗教画の主要なモチーフだった

胎毒と乳揉み

白井千晶
静岡大学教授

わたしが二〇〇一年と二〇〇三年に助産院で出産したとき、大正生まれの助産師、福岡光子さんは、生まれた子どもに「まくり散」という漢方の液体を飲ませていた。

別の味を知ったら苦くて吐き出すような味だが、「まだ母乳を口にしていないときには、美味しそうに飲む」と、生まれて間もなくまくり散を吸わせた。どの子も小分けにしておいた点眼瓶から上手に勢いよく飲んでいた。

まくり散は正式には、甘連大黄紅花茵蔯蒿湯などとよばれ、それに含まれる茵蔯蒿は肝臓に働きかけ利胆作用で炎症を抑え黄疸を除き、山梔子と大黄は小便と大便で瀉下して炎症熱を体外排出し、黄連は鎮静、紅花は瘀血を排出する、「胎毒下し」とよばれる漢方処方だ（配合はさまざま）。胎児が母胎内にいるときの腸内の便、ねっとりと黒みがかった「カニババ」（胎便）がよく出て、母胎内で受けるとされた「胎毒」が排出されて、母乳をよく飲み丈夫になるといわれていた。

助産師と乳揉みさん

まくり散を飲ませてから横に新生児を寝かせて頻繁に授乳すると、たちまち乳房がパツパツに張ってきて、陣痛のようにさえ感じるほど、いてもたってもいられない痛みになる。そんなとき、福岡先生は、「キャベツ湿布」といって、大きなキャベツから丸のままはがした葉をぱこっと乳房にかぶせた。なかに冷たいこんにゃくを入れることもあった。冷却材で冷やすと具合が悪くなるが、これらはいい具合に熱と腫れをとってくれるのだそうだ。

わたしは乳汁の分泌がよく、また仕事のために直接授乳できなくて搾乳していたこともあってか、よく乳栓が詰まったり、乳腺炎になった。その際には赤ちゃんを寝かせて覆いかぶさるように四つ這いになって頻繁に吸ってもらうようにと助言を受けた。それでも解消しないときは近所の助産院に駆け込んで乳房マッサージをしてもらった。

乳房マッサージは現在は助産師の職域だが、かつては按摩の職域だったそうだ。特に乳房ケアに長けた按摩は「乳揉みさん」とよばれていた。

板橋春夫氏が聞き書きした福井県敦賀市の昭和四年生まれの女性は、むかしはいた乳揉みさんは男性で目が悪く、按摩もやっていたという。初子のときは母親が揉んで乳が出なかったため次子のときには乳揉みさんを頼み、サンゴヤ（出産のために建てられた小屋。一般には産屋とよばれる）にも一緒に入ってもらったそうだ。つまり視覚障害の男性が乳揉み、按摩をしていたのである。

さらに、乳揉みさんではなく「近所のおばあさん」が吸ってくれたという証言もある。『亀山市史 民俗編』（亀山市編、二〇一一年）には、「乳が出過ぎた時、近所のおばあさんが吸って処置してくれた」（一九二二年生まれ）、「乳が出すぎて困った。乳房が張って痛くてどうしようもない時は綿打ち屋のおばあさんに乳を吸ってもらった。吸ってもらうと楽になったので、とても助かった」（一九三六年生まれ）とある。一方、同書には産婆が乳揉みをしたという証言もある。

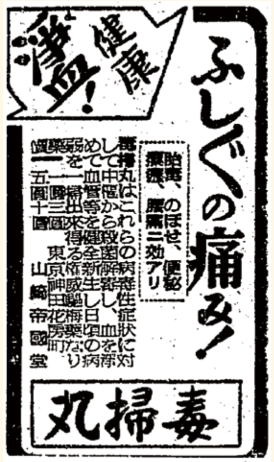
乳が出るように祈願し、奉納された絵馬
（上：京都府、H0021754、下：愛知県、H0015850）

Hからはじまる番号は本館の標本資料番号です。

変化する民間療法

伊賀みどり氏の研究では、一九六〇年ごろまでの兵庫県では、男性も含めた民間医療者、東洋医療従事者、一部の産婆が乳揉みさんだったのが、助産婦が取って代わっていったという。一九六〇年には、助産婦が乳房マッサージをなりわいとしていることを取り締まるよう按摩師が厚生省に要望を提出したが、逆に助産婦がなりわいとできるという回答が発出されている。

取って代わったとも一概にはいえず、板谷裕美・北川眞理子氏の岐阜県での調査では、産婆による乳房ケアや授乳指導はほとんどなく、産前産後の食事の知恵や手当の方法などが人びとのあいだで自然と伝承されていたそうだ。



胎毒下しの広告（朝日新聞より）
左：毒掃丸（1944年6月28日朝刊）
上：胎毒丸（1887年9月13日朝刊）
下：生長丸（1897年8月22日朝刊）
＊朝日新聞社に無断で転載することを禁じる（22-3505）

それが現在では、国際的には、授乳の指導者の国際認定ラクテーション・コンサルタント（IBCLC）は助産師でなくてもなれるが、日本では授乳指導や乳房ケアといえば助産師の独占状態になっている。鍼灸師などが乳分泌の改善を施術することはあるが、病院では産婦人科医もしくは認定された助産師がマッサージや指導をおこない、基準を満たしている場合は健康保険が適用される。

ちなみに、わたしは二〇〇七年に別の助産師に来てもらい自宅で第三子を出産した。乳腺炎になった際、彼女は当時しばしば使われていたホメオパシー（ドイツ発祥の同種療法）のレメディ（処方）で山ごぼうの砂糖粒をわたしに飲ませた。子にまくり散は飲ませなかった。民間療法でさえ、短い期間に随分変わったのである。

福知山市三和町大原の産屋（京都府有形民俗文化財）
（所蔵：大原神社、提供：福知山市教育委員会）

授乳したら親子
——ナイジェリア、ハウサ社会の授乳文化

梅津綾子（うめつ あやこ）
南山大学人類学研究所非常勤研究員

ウェブサイトでは
非掲載にしています。

産後40日が過ぎ、節目として産婦が近所に配るパンケーキを料理している（ザリア、2008年）

その女性はいたずらっぽい目をして「わたしがお乳をあげたのよ」と話してくれた。彼女はわたしがナイジェリア北部のある村で出会った、小学生の男の子の祖母であり、「里親」でもあった。産後すぐに他界した娘に代わり、その子を育てていた。

わたしはナイジェリア北部で多数派のムスリム・ハウサ人社会（以下、ハウサと表記）における、自分の子以外の子を引き取り育てる「里親養育」慣行（ハウサ語でリコ）について調べるために、二〇一〇年までの計二年間、現地に滞在していた。リコは、夫婦の離婚や死別あるいは不妊の夫婦が子を求める場合に限らず、子により良い教育環境を与えるためや、親同士の信頼の証として等の理由からおこなわれる。ここでは、滞在中に見聞きした、リコとは異なる方法で「親子になる」、授乳に関する語りについて紹介したい。

母乳により作られる母子関係

授乳と出産は切っても切り離せない。例えば産後四〇日までの産婦は「メイ ジェーゴ」とよばれるのだが、ジェーゴには「授乳」の意味が含まれている。また産婦は乳の出を良くするために、特定の飲み物を毎日飲むと良いと伝統的に推奨されている。

授乳期間は一年半〜二年間であり、リコも、生母が健在であれば卒乳後におこなわれる。母乳は子にとってとても重要と認識されている。それは栄養面に限らず、子の人格や親子関係にまで大きな影響を与えるといわれる程である。母乳が十分でなければ、粉ミルクや牛乳が使われる。とはいえ、村の男性ハムザ（推定四十代、仮名、中高等学校の教員）によると、卒乳前は子どもが「小さすぎる」し、「母親が同意しない」ため、リコはおこなわれない。「誰も子がお乳を吸うのを遮れない」のであり、「我々の文化では伝統的に、十分に母乳を吸わせなかった子は活動的でなくなる」のだという。

さらに彼は、もし赤ちゃんが生後すぐに育ての母に引き取られると、母乳を吸わなかったために、その子は生母に優しくせず、また生母の体調が悪くても彼女の世話をしないと語る。なぜなら「子はお乳を吸うことをとおして、母親の性格や行動、体調等を（自分と）一体化させる」からである。関連して「母親が弱っていれば、母乳をとおして子も弱る」という。わたしが村でお世話になった家庭でも、授乳期間中の母親が咳（せき）をしていた際に、年配の女性が彼女の赤ちゃんを抱きながら、母親の体調が良くないので母乳をあげられないと語っていた。これはハムザのいう授乳観念とも呼応すると思われる。

加えてハウサには、母乳を血縁と結びつける生殖観も存在する。わたしが大変お世話になった、「里子」と「里親」の経験、および実子をもつ男性アハメッド（四十代、仮名、理系研究者）は次のように説明する。ハウサにもいわゆる「血は水よりも濃い」という観念が存在し、その「血」は「母乳と生物学上の父の精子」から成るのだという。ここでの「血」は生物学上のつながりを表象する観念的なモノである。母乳もまた、「血」と同様に親子を身体的につなぐ観念的なモノとしてとらえられているということだろう。

もらい乳でも作られる母子・キョウダイ関係

母乳の影響力は産みの母と子の関係に留まらない。アハメッドの妻メムナ（四十代、仮名）が、「一人の子に複数の女性がお乳をあげるのは構わない」と語るように、ハウサでは生母の代わりに別の女性がお乳を与える場合もある（もらい乳）。しかも授乳した者とされた者のあいだには婚姻規制を伴う親子関係が発生するという。メムナによれば、お乳を他の子に吸わせると「彼女たちの息子・娘（実子）は（もらい乳を受けた子と）結婚できない」、授乳したら我が子、なのだという。

授乳自体が産みの母に限定されていない点で、ハウサでは授乳が社会に開かれているといえよう。一方で、母乳が子の健康状態、さらには人格や母子関係にまで影響するという語りや、「お乳をあげたら（婚姻規制を伴う）親子」になるという語りは、ハウサ社会が、お乳に特別で代替不可能な価値を認めていることも示唆している。ハウサの授乳文化は、社会が支える育児と、親子の排他的・観念的な絆（きずな）の構築が両立する点で、とても興味深く映るのである。

ウェブサイトでは
非掲載にしています。

本文冒頭の「里親」の女性（ザリア、2010年）

左上：母乳の出を良くするために飲む伝統的な飲み物（ザリア、2008年）
左下：産婦と赤ちゃんのための薬湯。体を温める目的で水浴びや飲用に使われる（ザリア、2010年）
右：薬湯の原料となる薬草。これを煮だして濾して用いる（ザリア、2010年）

罪人にならないように——韓国の搾乳器

諸昭喜（チェソヒ）
民博 グローバル現象研究部

妊娠にかかわる施設であれば、どこでも見られるキャッチフレーズ「母親から赤ちゃんへの最高の贈り物は、母乳です」をもち出すまでもなく、韓国でも母乳の重要性はすでに常識になっている。

粉ミルクのほうが母乳よりも栄養があるとされ、中流以上の家庭では生後三～六カ月からアメリカ産の離乳食や粉ミルクを母乳と一緒に与えた時期があったが、一九八〇年代初めに世界保健機関（WHO）とユニセフが粉ミルクの誇大広告を禁止したのに合わせて、韓国でも母乳授乳が推奨され始めた。一九八三年から小児科医を中心に母乳授乳に関する研究が活発になり、女性の消費者運動を中心に、母乳に対する意識が高まった。このような市民社会の動きは、一九九〇年に「すべての女性が赤ちゃんに母乳を与えることができなければならず、出生後四～六カ月間、すべての赤ちゃんが母乳だけで育てられなければならない」というイノチェンティ宣言をきっかけにして本格的に政策のなかに取り込まれた。また、ある統計では、妊婦の九九・六パーセントが「母乳で育てたい」と答えているように、妊婦自身にも母乳授乳への強い願いがあるようだ。

ソウル市が出産祝いとして支給した授乳セットのなかのポータブル電動搾乳器のひとつ
（支給期間は2018年7月～2022年3月）

一石二鳥を願う——搾乳器

しかし、理想的な計画は簡単に実現できるわけではない。ある研究によると、完全に母乳だけを授乳する割合は生後一カ月に三六・六パーセントだが、生後六カ月には二・三パーセントと報告されている。あまり母乳が出ないという身体的な要因もあるだろうが、経済活動に参加する女性が増え、そのうちほぼ半数が不安定な非正規職の形で働いている状況を考えると、出産休暇を申請することはもちろん、推奨されている六カ月間の授乳は現実的には難しいミッションになる。

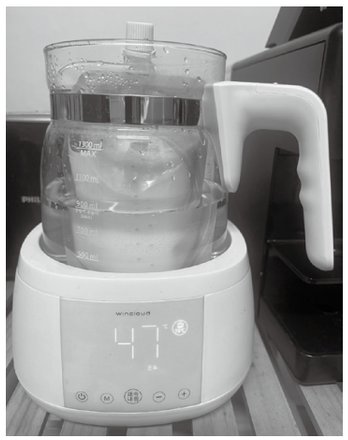
一方で、超少子化社会である韓国では、出産と育児に対するさまざまな認識の変化が見られる。特に、夫婦間の家事や子育ての分担に対する平等意識が高まっていて、子育ては母子関係の構築に重点を置くよりも、夫婦共同でおこなうべきものだという認識が強くなっている。

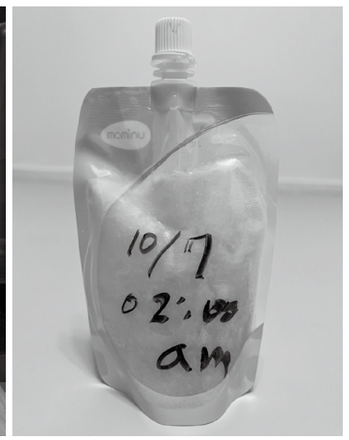
このような状況で、母親以外の人も新生児をケアできるようにと広まったのが「搾乳器」である。搾乳は、夫を育児に参加させ、母親には睡眠と休息、職場復帰、ときには外出の自由を叶（かな）える手段となる。これを反映するように授乳室は徐々に「家族授乳室」へと名前を変え（二〇二一年一二月時点で三〇〇六カ所のうち八三パーセント）、父親も授乳できる空間に変わっている。この部屋は搾乳器や母乳保存パックなどを備えた「搾乳室」としても機能している。

初めてのミルクはパパが飲ませた母乳だった
（撮影：キム・ソウォン、テグ市、2021年）

産後ケア施設での母乳授乳サポート

また、韓国には「授乳キャンプ」や「母乳授乳のための訓練施設」などとよばれる産後ケア施設（産後調理院（サンヌジョリウォン））があり、出産後、母子は約二週間入院してケアを受けることができる。産後養生の具合で女性の今後の健康が決まると信じられている韓国社会では、産後のケアは新生児よりも母親が気力を回復するためのサービスが中心となるが、なかでも重要なものに、母乳授乳のサポートが挙げられる。個室や授乳室には電動搾乳器が用意されており、母親は少なくとも四～五時間ごとに赤ちゃんに直接授乳するか、または搾乳をする。スタッフは搾乳した母乳の量をチェックして乳房マッサージや乳腺炎の処置をし、子どもの状態を見ながら授乳するタイミングを指導する。このようなサポートの成果は、完全母乳授乳率が生後一週目に一六・一パーセント（粉ミルク授乳率八三・九パーセント）、生後二週目に三六・五パーセント、生後三週目に四〇・三パーセントと高まり、生後四週目で最高点に達するという研究結果にもあらわれている。ケア施設は母親がゆっくりと新生児を受け入れられるように教育とサポートを提供するママ学校としての役割を果たしている。





搾乳した母乳は保存パックに入れて保管。子どもに与えるときはパックごと適温に温めることができる（撮影：チョン・チャンフン、ソウル市、2022年）

健康な赤ちゃんのための母乳授乳キャンペーンは、皮肉にも母乳を、母性愛をはかる指標とし、母乳授乳をしない、あるいはできない母親をまるで「罪人」のように扱ってしまった。このような状況で、韓国の女性は母乳授乳という任務と仕事を両立させる方法として、産後ケア施設へ入院し、搾乳器を使用している。しかし、これが唯一の正解ではない。子育てしやすい社会の実現のためには、我々は今後も悩み、努力し続けなければならないだろう。

左：産後ケア施設の利用者用の個室。ベッド脇の棚に搾乳器が見える（撮影：キム・ソウォン、テグ市、2021年）
右：テジョン市の百貨店にある家族授乳室。左から給水器、母乳用湯煎器、哺乳瓶消毒器が設置されている（2022年）

みんぱく回遊

貝を捕る、藻を採る

金丸雄一
総合研究大学院大学博士後期課程

民博には、海の民とその暮らしにまつわる展示が多い。まず入口すぐのチェチェメニ号が、圧倒的な迫力で来場者の皆さまをお出迎えする。海の人類大移動を物語るオセアニア展示場は、まさに海と人のかかわりを示している。南アジアや東南アジア、東アジア――中国地域の文化、中央・北アジアなどの展示場でも、多種多様な漁撈用具がそれを物語っている。

海と人のかかわりは、日本の文化展示の「網漁」「釣り漁」「磯漁」コーナーや「沖縄のくらし」、アイヌの文化展示でも観られる。これらと世界の諸地域とのつながりを観るのもよい。例えば沖縄のウミンチュは、ミーカガン（二眼の水中メガネ）を考案し、出稼ぎで広く世界の海を渡り歩いた。見聞した世界中の海民たちも導入し、業界標準のように広まった。自分の手柄ではないのになにやら誇らしくなってしまう。

日本の文化展示「海のくらし」コーナーには、大漁旗が勇壮に舞っている。万祝（漁師の晴れ着である祝着）からは豊漁に歓喜する声が、神輿の海中渡御の光景からは海上安全を祈る静謐さが心に響いてくる。パネルの一枚、浜で三番叟が舞われているのは、三重県志摩半島が舞台である。これも海から伝わってきた江戸時代の上方文化である。海は、人の営みのあらゆるものを運んできた。

筆者は海士である

沖縄のミーカガンは明治中期には、房総半島や三重県のアマ（海女・海士）にも広まった。時を同じくして、志摩半島では一眼レンズ式のメガネが開発され、今でも用いられている。

筆者は海士である。春夏はアマ漁でアワビなどの採貝やワカメ・ヒジキなどの採藻をしている。筆者の船に乗る八十代海女たちは、この磯メガネの板ガラスを、むかしながらのヨゴメ（ヨモギ）でキュッキュッと磨いて曇り止めする。老眼仕様の特注品を使うバアもいる。良好な視界を確保してから、貝を捕るイソノミや海藻を採るイソガマを手に、アマたちは潜降していく。

海洋環境の変動でここ8年なくなっていたテングサが復活。久々に多く採れて、80代の高齢海女たちの喜ぶ顔がまぶしい（三重県、2022年夏）

これらアマ道具に並んで、板ガラスを木枠で囲んだ箱メガネが展示されている。潜らずに船上から覗き見してとる「見突き（磯見／貝突き）漁」にて用いるものだ。当然ながら獲物との距離が遠く、イソノミやイソガマを使えない。これらを竿先に付けたような柄の長い採集用具が生み出された。列島各地にある、漁場や獲物に応じた多様な形状は、漁民の知恵の賜物である。

激闘！　見突き漁

筆者は見突き漁師でもある。所属地区では冬磯（冬のアマ漁）は禁止されているので、正月の縁起物のナマコは、船上からタモ網竿で捕らねばならない。見突き漁は、アマ漁の潜水をともなう習熟度とは別次元での、熟練と忍耐を要する。竿使いの熟練が求められるのは理解できよう。だが、忍耐については今ひとつピンと来ないかもしれない。

箱メガネは、手で持つタイプと歯で噛むタイプとに分類されるが、我々は両立てだ。北風を正面から受ける海域だからである。凪に喜び出漁するも、決まって風向きが一変、ピューピュー吹きすさぶ。海面が波立ち、箱がグラグラ暴れ出す。それを噛む歯はギシギシと容赦なく痛め付けられ、額は枠のヘリでガンガンと打ち付けられ、余裕がない。

しかし、歯だけでメガネを支えねばならぬ瞬間がある。ナマコを見つけ己の位置を微調整し、左手で船外機のバックギア、右手で数メートルにおよぶ竿を操るときだ。竿先が獲物に迫った刹那にザブンッと来るのは日常茶飯事で、両手が塞がっていればド根性で歯を食いしばり捕りきるだけである。箱のなかが水浸しでも、マウスピース部が噛みちぎれようとも、アゴがつるほどでも。捕りっぱぐれてギアのスロットルを上げ獲物を追うときには、歯茎と意地だけが箱メガネを支える。筆者は今までどれほど「うおおおー、コノヤローー！」と一人、箱のなかで絶叫してきたことか……。

下を向きっぱなしの数時間の激闘と重力が、ナマコ捕りたちの顔をまるで試合で負けたボクサーのように腫らす。漁を終え陸にあがった漁民たちは、負け犬のような他人の腫れた顔を見て笑い、歯茎から血を出し額が擦りむけた自分の顔を笑われる。

こんな漁民の息遣いが、民博の展示場から漏れ聞こえてくるかもしれない。試しに、箱メガネのヘリに噛み痕が刻まれているか、ぜひご覧あれ。

Hからはじまる番号は本館の標本資料番号です。

志摩沿岸のカジメ場（水深9メートルほど）。このコンブ科海藻の海中林には、おもにメガイアワビとマダカアワビが棲む（三重県、2022年冬）

イソノミ。獲物によりヘラ部とカギ部を海中で持ち替えて使用する（80代海女個人蔵）

INFORMATION みんぱく インフォメーション

重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症の状況によっては、催し物の予定を変更・中止する場合があります。事前に本館ホームページでご確認ください。

イベント予約はこちら

みんぱくホームページ
催し物のご案内
https://www.minpaku.ac.jp/event

特別展

「ラテンアメリカの民衆芸術」

ラテンアメリカの歴史と諸民族の文化を反映した民衆芸術の展覧会です。あふれる色とはじける形、驚異的な創造力と鋭い批判精神をご鑑賞ください。

会期　3月9日(木)～5月30日(火)
会場　特別展示館

木彫(ヤギのナワル) メキシコ合衆国
(撮影：六田知弘、六田春彦)

公開講演会

『目に見えないもの』と生きる
――食からみたヒトと微生物のかかわり」

コロナ禍ではわたしたちの生が「目に見えないもの」との関係において成り立っていることがあらわになりました。そのことを踏まえ、食を切り口にヒトと微生物などの「目に見えないもの」とのかかわり合いについて考えます。

日時　3月31日(金)18時30分～21時(17時30分開場)
会場　オーバルホール(大阪市北区梅田)(定員480名)
講演　奈良雅史(本館 准教授)
　　梅崎昌裕(東京大学 教授)
　　小倉ヒラク(発酵デザイナー)
コメント　宇田川妙子(本館 教授)
パネルディスカッション
　　奈良雅史 × 梅崎昌裕 ×
　　小倉ヒラク × 宇田川妙子
※オンライン(ライブ配信)でもご参加いただけます。

【申込期間】
2月13日(月)～3月23日(木)
主催　国立民族学博物館
　　毎日新聞社
※事前申込制、先着順、参加無料
※手話通訳あり
お問い合わせ先
本館研究協力課研究協力係
06-6878-8209

人間文化研究機構プロジェクト関連シンポジウム

「写真家・井上隆雄の視座を継ぐ――仏教壁画デジタルライブラリと芸術実践」

井上隆雄は1970年代にインド・ラダックとミャンマー・バガンを取材し、確かな技術で仏教壁画をとらえました。井上が残した写真資料の可能性と意義を考えます。併せて、関連資料を展示します。

日時　3月12日(日)13時～17時(12時開場)
シンポジウム会場
　本館第4セミナー室(定員50名)
展示会場
　本館第3セミナー室(10時～17時)
発表者・解説
　正垣雅子(京都市立芸術大学 准教授)
　石山俊(本館 プロジェクト研究員)
　丸川雄三(本館 准教授)
　岡田真輝(京都市立芸術大学 井上隆雄写真資料アーカイブ研究員)
　寺井淳一(東京外国語大学 特別研究員)
　翟建群(京都市立芸術大学 特任准教授)
　ディスカッションモデレーター
　　末森薫(本館 准教授)
※シンポジウムはオンライン(ライブ配信)でもご参加いただけます(定員300名)。

【申込期間】
2月1日(水)～3月7日(火)
主催　京都市立芸術大学
　　人間文化研究機構共創先導プロジェクト共創促進研究「学術知デジタルライブラリの構築」
　　国立民族学博物館拠点
※事前申込制、先着順、参加無料
お問い合わせ先
本館研究協力課共同利用係
kikourenke@minpaku.ac.jp

みんぱくミュージアムパートナーズのワークショップ

「点字体験ワークショップ」

日時　2月11日(土・祝)
　　12時～15時30分
　　(最終受付15時)
会場　本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、随時受付

受賞

「モンゴル国北極星勲章」を受賞

本館の小長谷有紀客員教授が、長年にわたるモンゴル国の文化振興、研究活動に貢献したことにより、モンゴル国オホナーギーン・フレルスフ大統領より、「モンゴル国北極星勲章」を授与されました。

東京ドキュメンタリー映画祭【人類学・民俗映像部門コンペティション】で準グランプリを受賞

本館の川瀬慈准教授が監督・撮影した新作映画「吟遊詩人 声の饗宴」が、東京ドキュメンタリー映画祭2022【人類学・民俗映像部門コンペティション】において準グランプリを受賞しました。

巡回展

「驚異と怪異――想像界の生きものたち」

世界の人びとは常識や慣習から逸脱した「異」なるものを、どのように認識し、説明し、描いてきたのでしょうか。奇妙で怪しい、不気味だけどかわいい、世界の霊獣・幻獣・怪獣が大集合！

会期　3月11日(土)～5月14日(日)
会場　福岡市博物館　特別展示室
主催　福岡市博物館
　　国立民族学博物館
　　公益財団法人千里文化財団
　　テレQ
　　西日本新聞社
　　西日本新聞イベントサービス

フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトデータベースを館外公開

3件のフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトデータベースを館外公開しました。ぜひご活用ください。

■**「セネガル河上流域の民族文化の映像データベース」**
https://ifm.minpaku.ac.jp/hautsenegal/

■**「中央・北アジア物質文化資料データベース」**
https://ifm.minpaku.ac.jp/cnasia/

■**「ラテンアメリカ地域文化資料データベース」**
https://ifm.minpaku.ac.jp/americalatina/

刊行物紹介

■鈴木七美 著
『エイジングフレンドリー・コミュニティ――超高齢社会における人生最終章の暮らし方』
新曜社　3,080円(税込)

心地よく年を重ねられる「居場所」とは？　福祉先進国デンマークをはじめ、世界各国、そして国内での調査からみえてくる高齢期の多様な「居場所」のあり方と、それぞれの人生の物語から、多文化共生の意義を追求した。

■鈴木七美 著
『アーミッシュキルトを訪ねて――照らし出される日々の居場所へ』
大阪大学出版会　2,970円(税込)

無地の布を組み合わせた幾何学模様のアーミッシュキルトは、かれらの信仰にもとづくきまりに合わせて作られてきた。本書は、キルトづくりから、アーミッシュがプレーン(簡素)で共に生きるコミュニティを創り続ける理由を探求した。

みんぱくゼミナール

会場　本館第4セミナー室(講師登壇会場)80名、本館第5セミナー室 他(中継会場)100名
※第4セミナー室が定員に達し次第、中継会場へご案内します。
※当日参加受付あり(定員36名)
※事前申込制(先着順)、参加無料

第530回
2月18日(土)13時30分～15時(13時開場)
家族農業の軌跡をたどる
――オーストリアの調査から
講師　森明子(本館 教授)

【申込期間】
■ 一般受付　2月15日(水)まで
　※友の会先行受付は終了しました。

第531回
3月18日(土)13時30分～15時(13時開場)
民衆芸術
――ラテンアメリカの人びとの創造力と批判力
特別展「ラテンアメリカの民衆芸術」を楽しむためのポイントを解説します。多様な民衆芸術が育まれた歴史、芸術として洗練されていった過程、そして作品に込められた批判精神についてお話しします。
講師　鈴木紀(本館 教授)

【申込期間】
■友の会先行予約
　2月13日(月)～17日(金)(定員36名)
　会場参加対象
　【申込先】
　国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
■一般受付　2月20日(月)～3月15日(水)

みんぱくウィークエンド・サロン――研究者と話そう

会場　本館展示場(ナビひろば)
※定員なし(ご自由に参加いただけます)
※ 申込不要、参加無料(要展示観覧券)

2月12日(日) 14時30分～15時
オーストラリア先住民の夢見の世界
話者　平野智佳子(本館 助教)

2月26日(日) 14時30分～15時
東南アジア展示資料収集裏話
話者　樫永真佐夫(本館 教授)

お問い合わせ
国立民族学博物館 広報・IR係
電話 06-6878-8560 (9時～17時、土日祝を除く)　FAX 06-6875-0401
お問い合わせフォーム https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form

友の会

お申込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。

友の会講演会

参加形式
①本館第5セミナー室(定員90名)
②オンライン
友の会会員：無料
一般(会場参加のみ)：500円
※事前申込制(先着順)
※会員は会場参加の場合、事前申込不要

第533回　2月4日(土)13時30分～15時
モンゴル遊牧民の"ルームツアー"
――モノの配置にみる生存戦略
講師　堀田あゆみ
　　(大阪国際大学 非常勤講師)
※講演会終了後、中央・北アジア展示場のゲルを見学します(定員20名・事前申込制、要会員証もしくは展示観覧券)。

第534回　3月4日(土)13時30分～15時
中国における宗教と風紀
――回族によるアルコール排斥運動の展開
講師　奈良雅史(本館 准教授)
中国において宗教活動は政府の管理統制下にあります。こうした状況下、イスラーム系少数民族の回族は、状況に応じて中国政府の社会政策を部分的に取り入れながら、宗教活動を展開してきました。本講演では、回族によるアルコール排斥運動の事例から、多義的なものとして立ち現れるイスラーム的な風紀のあり方に迫ります。

東京講演会

参加費　友の会会員：無料、一般：500円
※事前申込制(先着順、定員40名)
※オンライン配信はありません。

第132回　2月26日(日)13時30分～15時
ペルーの民芸品制作と職人たちのいま
講師　八木百合子(本館 准教授)
会場　モンベル御徒町店4階サロン
　　(東京都台東区上野3-22-6　コムテラス御徒町)
ペルーには、地方色豊かな民芸品が数多く存在します。民芸品制作は、時代の流れのなかで作風や技法が変わるだけでなく、それらがもつ社会的な意味や位置づけも大きく変化してきました。とくにここ数年は、国の文化遺産に指定し保護・育成する動きも高まっています。この講演会では、ペルーの民芸品制作の歴史とその制作に携わる現代の職人たちの取り組みについて紹介します。

お問い合わせ
国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)
電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く)　FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

○○してみました世界のフィールド

ジンバブエで髪を切る

早川 真悠（はやかわ まゆ）
民博 外来研究員

髪を切りたい

南部アフリカにあるジンバブエ共和国の首都ハラレで約二年間のフィールドワークをしていたときのこと。調査を始めて半年が過ぎたころ、伸びてきた髪が気になり、ついに我慢できなくなった。自分で切ろうと、文房具のハサミを用意して庭先の明るいところへ鏡を運んだ。しかし、いざ切ろうとすると、失敗して変な髪形にならないか不安になり、けっきょく美容院へ行くことにした。

手入れした髪で教会へ行く女性たち（ハラレ、2005年）

現地の人からあらゆることを教わりながら暮らすのが人類学者の仕事だ。しかし、髪の切り方や手入れの仕方を、わたしは誰からも教えてもらえなかった。球状毛とよばれるアフリカ系の人びとに多い縮れ毛は、そもそもあまり長く伸びない。まっすぐ伸びるわたしの髪は現地女性たちには憧れのようで、わたしが髪を切りたいと言うといつも反対にあった。わたしに言わせれば、彼女たちの地毛を活かしたナチュラル・ヘアは、横顔や首筋の美しいラインが際立ってとても素敵だ。しかし、特に都市に住む女性たちは素朴なスタイルをあまり好まず、縮れ毛を櫛（くし）で伸ばして近所の人や美容院で髪を編んでもらったり、つけ毛をつけたり、化学薬品でストレートにしたりして、切るのではなく髪形や髪質をさまざまに変化させて髪を手入れしていた。

社交の輪としての髪の手入れ

髪の手入れはおしゃれや身だしなみだけではなく、社交の機会も与えてくれる。友人に付き添って現地の美容院を初めて訪れたとき、その雰囲気に驚いた。鏡の周りには客だけでなくその友人たちが話し相手として居座り、スタッフのほかにも客に何かを売ろうとする行商人がうろうろ歩き回っていた。

店内はごった返したように見えるが、そこにいる女性たちはとてもリラックスしたようすで思い思いにおしゃべりに花を咲かせていた。

髪形を新しく変えるとき、それまでのつけ毛をはずしたり、編み込みをほどかなくてはならない。絡まった縮れ毛をほどくのは一苦労だ。家や外で誰かが髪をほどいていると自然に人が集まってきて、皆でおしゃべりをしながら手を動かし、ときに何時間も作業する。

フィールドワーク中、わたしは同年代の現地女性と家を借りて生活していた。ルームメイトが髪をほどく作業をわたしも何度か手伝ったことがある。あるとき、ルームメイトから「あんたは、これ（髪をほどくのを手伝うこと）ができないね」と言われた。当初わたしは、作業の遅さや忍耐力のなさを批判されているのだと思っていた。しかし、今思うと、自分の髪をほどいてもらった経験のないわたしがこの作業を心から楽しむことは難しく、現地の人には当たり前でお互い様のこの輪のなかにいまいち入り込めていないことを、ルームメイトは残念がっていたのだろう。

皆で協力して髪をほどく（チノイ、2005年）

薄暗い美容院

さて、わたしが髪を切ろうと訪れた美容院は、白人客も集まるハラレ郊外のショッピングモール内にあった。ここならわたしの髪も切ってもらえるだろうと勝手に期待した。店内はとても暗く、客もおらず、まるで営業していないかのようだった。奥から黒人の年配女性の美容師がエプロン姿であらわれて、わたしを鏡の前の席へと導いた。わたしが座ると、美容師は言った。「停電なのよ」。

そうだった……。当時ジンバブエでは停電や断水が日常化していた。すぐに立ち去ればよかったのだが、頭が回らなかった。そのままわたしは「こんなふうに切れますか？」と、用意してきた日本人の髪形の写真を見せた。「できますよ」と美容師は答え、霧吹きでわたしの髪を濡（ぬ）らすと、迷うことなくチョキチョキとハサミを入れ始めた。どうなるのかと思っていると、美容師は不意に手を止めて、「終わり」と言った。暗がりの鏡には、明らかに前髪を短く切られ過ぎた自分が映っていた。美容師は続けた。「停電だからドライヤーは使えないの。これでおしまいよ」。

通常どおりの代金を支払い、びしょ濡れの髪で自転車を漕（こ）ぎ、途中で知り合いに会わないことを祈りつつ、急いで家へ帰った。わたしが現地で経験した髪の手入れは、社交の輪からはほど遠かった。

上：ハラレの街並み（2005年）
下：ジンバブエの美容院（チノイ、2006年）

美容院に行ってみました

髪を編むようすを見る筆者（左）
（筆者友人撮影、ハラレ、2005年）

コレクション
あれこれ

博物遺産のデータベース

野林 厚志　民博 学術資源研究開発センター

タイヤルの集落でのワークショップにて、資料をもとに再現された織布の説明を受ける筆者（台湾、2019年）

民博には、台湾に関連する標本資料が六〇〇〇件弱ほどある。その多くがオーストロネシア系先住民族である台湾原住諸民族（以下原住民族）に関連し、第二次世界大戦以前に収集されたものである。収集の経緯はさまざまであり、東京大学理学部人類学教室からの寄託資料（東大コレクション）、民博の前身ともいえる日本民族学会附属博物館の資料（アチック・保谷民博コレクション）、台湾総督府の職員であった瀬川孝吉氏の寄贈資料（瀬川コレクション）等を中心とし、田中千代コレクションにも保存状態のよい衣類が収められている。

コレクションの情報

今から約三〇年前、筆者がはじめて民博に資料の調査に訪れたとき、コンピュータに入力された資料情報をミシン目の入った印刷用紙にどんどん打ち出してもらったことが強く印象に残っている。当時、大学博物館付きの学生であった筆者は、資料カードを一枚ずつ書き写す覚悟だっただけに、「早っ、ラッキー」と思ったのだった。後になり、民博は博物館であるとともに情報も広く扱う博情館を標榜していることを知った。資料の情報をいかに飼いならすかが民博の大切なミッションのひとつであり続けてきたのであろう。コンピュータの性能が格段にあがり、データベースの利用が身近になり、なによりもインターネットの普及で、情報の公開、交換が前の時代に比して格段に進歩したことは、民博の資料がもつ可能性を大きく広げている。

さて、運よく民博の一員になれたわたしは、台湾資料に対する責任をひしひしと感じることになった。鳥居龍蔵、鹿野忠雄、馬淵東一といった先達が収集し研究した、いわば博物遺産を継承し、現代、さらには未来に活かしていかねばという勝手な思い込みではあるのだが。時期を同じくして、原住民族からの資料に関する問い合わせが増えた。一九九四年の憲法改正によって、台湾の先住民族として公的に承認された原住民族は、自分たちの歴史を探究し、それをさまざまなかたちで次の世代に伝えていく活動を盛んにさせていったからだと思われる。そして、そのひとつが工芸制作である。過去に作られたものを調査し、形や色彩、用いられた素材や技術、ふれることでえられる感触を調査することは、あらたな工芸制作に欠かせない。原住民族が国内外の博物館に祖先の遺産を求めるなかで、民博のコレクションも衆目を集めることとなった。

コレクションを伝えるデータベース

「どのようなものが民博にはあるのか？」は原住民族にとって大切な情報であり、それを伝えるために、資料の情報を提供するデータベースは極めて有効な手段となる。筆者は、民博のフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトをとおして、日本語、英語、中国語で民博の所蔵資料を参照できるデータベースを作り一般公開した。これによって、博物館側へ問い合わせ、その返事の時間を待つまでもなく、事前にデータベースから資料の写真をダウンロードし、予習を十分にした博物館の熟覧調査の計画が立てられるようになった。パイワンの織物制作者である許春美（Ljumiyang Tjasa）氏の著作『tjinnun nuwa paiwan（パイワン族の織布）』に掲載されたパイワンの織布の制作に先立つ民博での熟覧調査では、データベースが果たす先述の役割は小さくないことを経験した。また、誰もがアクセスでき、台湾の標準語である中国語で参照できるデータベースは民族グループの境界をこえた協働を可能とし、熟覧調査の経験を他の人たちに共有するためにも一役買った。時間や場所に限定されない資料へのアクセス環境は、熟覧に来られない人たちも資料の細部を見ることを可能にさせ、原住民族が台湾で独自の工芸ワークショップをするときにも参照できるからである。「前回はパイワンの調査だったから、次はカナカナブの調査をしよう」、なんてことが民族グループをこえて企画されていく場面が生まれていくのである。

博物館に収蔵されているコレクションは由来する場所と時間の脈絡によってさまざまなとらえかたがあるだろうし、現代や未来における活用のされかたもさまざまであろう。したがって、それを一括して同じように扱い続けることはできない。文化に多様性があるように、博物館のコレクションもまた多様性をもって存在しているのである。

1：男性用スカート（礼服用）の一部（H0019066）
2：民族集団の垣根をこえておこなわれた熟覧調査（大阪府吹田市、2018年）
3：タイヤルの集落でのワークショップにて、糸作りを体験する筆者（台湾、2019年）
4：ワークショップを通じた経験の共有（台湾、2019年）

H・Kからはじまる番号は本館の標本資料番号です。

台湾および周辺島嶼の物質文化

資料点数：5671点
台湾に関連するコレクション群。その大半はオーストロネシア系先住民族である台湾原住諸民族に関連する。第二次世界大戦以前に収集されたものが多く、東京大学人類学教室や民博の前身ともいえる日本民族学会附属博物館の資料等で構成されている。フォーラム型情報ミュージアム「台湾および周辺島嶼の物質文化」データベースに掲載。
https://ifm.minpaku.ac.jp/taiwan/

ベスト（晴れ着）（H0024306）

トンボ玉（H0028655）

土偶（H0013930）

腹巻き（H0232049）

杓子（K0003938）

シネ倶楽部M

天賦の才能とそれを支えるチームの葛藤

松本 文子（まつもと あやこ）
民博 機関研究員

初めて東京に来た際に地下足袋から着想を得て生まれた、マルジェラのアイコンともいえるタビシューズ
© 2019 Reiner Holzemer Film - RTBF - Aminata Productions

「マルジェラと私たち」

原題：We Margiela
2017年／オランダ／オランダ語、イタリア語、英語／103分／DVDあり
監督：メンナ・ラウラ・メイール
出演：ジェニー・メイレンス、ヴィッキー・ロディティス、グレース・フィッシャーほか

「マルジェラが語る“マルタン・マルジェラ”」

原題：Martin Margiela: In His Own Words
2019年／ドイツ、ベルギー／英語、フランス語／90分／DVDあり
監督：ライナー・ホルツェマー
出演：マルタン・マルジェラ（声のみ）、ジャン=ポール・ゴルチエ、カリーヌ・ロワトフェルドほか

2009年春夏コレクション
© 2019 Reiner Holzemer Film - RTBF - Aminata Productions
（写真はすべて「マルジェラが語る“マルタン・マルジェラ”」より。提供：アップリンク）

移り変わりの早いファッションの世界で、五〇年もの時代を創（つく）った人物マルジェラ（映画台詞（せりふ）より）。その足跡は、「脱構築」を掲げて老舗（しにせ）エルメスで発表した従来のイメージを打ち破る挑戦的なコレクション、アイテム自体を見てもらうために顔出しをしなかったこと、ブランド名の無いタグの採用、流行に左右されないシンプルなデザインや色使いのアイテムなど、枚挙にいとまが無い。そして二〇〇八年、突如ファッション界から姿を消す。

マルジェラは、アントワープの六人として有名なドリス・ヴァン・ノッテンらと同時期に、アントワープ王立芸術アカデミーを卒業したファッションデザイナーだ。ブランド「メゾン・マルタン・マルジェラ」のアイコンであるタビシューズは、すっかり定着しているけれど、オリジナルが発表されたのは一九八〇年代ということにも驚く。コムデギャルソンの川久保玲（かわくぼれい）や日本文化に影響を受けたという本人の語りから、西洋のイメージが強いファッションの世界にも、東西の文化が影響を与え合っていることが読み取れる。

ジェンダーの解放と環境的価値観

マルジェラの姿勢はカウンターカルチャーで、それまでの贅沢（ぜいたく）で美しいファッションのイメージを覆すように、ストリートでモデルを発掘したり、女性が外見で判断されることに抗（あらが）ってモデルの顔を袋で隠した。蚤（のみ）の市やアンティークからモチーフを得て、職人的な、という意味のアーティザナルコレクションを発表した。今や多くの人が身に纏（まと）っているくすんだ、オーガニックな色合い、オーバーサイズのユニセックスなスタイルに繋（つな）がっていて、二〇二二年の現在でも新鮮である。

彼の先見性やデザインの普遍性が、さまざまな人によって語られる映画である。現役のあいだも本人は表の場に顔を出すことが少なく、謎多き存在となっていることが二本の映画に対する興味をさらに高める。

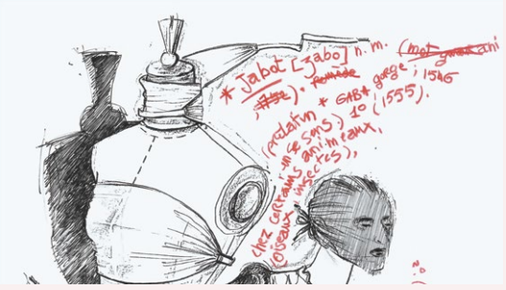
なぜ二本かというと、二〇一七年に制作された「マルジェラと私たち」は、ビジネスパートナーであったジェニー・メイレンスを中心としたブランドの仲間たちが語り、その後二〇一九年に制作された「マルジェラが語る〝マルタン・マルジェラ〟」は、本人が語っているという違いがある。「マルジェラと私たち」では、繊維業者から広報担当者まで幅広く、当時のファッション業界の若者たちがマルジェラの才能に惹（ひ）き付けられていくダイナミクスと、いつのまにかブランドが世間に賞賛され、ビジネスとしてマネジメントすることに苦しみチームが解散してゆく展開が、オランダ語、イタリア語、フランス語、英語を交えて語られ、国や言語を超えてコンセプトを共有したマルジェラの魅力が窺（うかが）える。

創造性の本体を描き出す

チームはマルジェラの繊細さやスタッフへの気遣い、ぶれない軸や先見性を高く評価してはいるが、本人が不在であることから、その真否が気にかかった。

そしてマルジェラ本人が登場する「マルジェラが語る〝マルタン・マルジェラ〟」は、前作への反論かと思いきやチームに対する感謝で溢（あふ）れている。当作では、本人のことばを中心にしながら、果敢に挑戦する一方で繊細にコミュニケーションを扱う、マルジェラのアーティスティックな性質、歩みを振り返っていく。

わたしは創造性について研究しているが、創造性が文化を生み出す役割をもつ一方、創造性を合理的にコントロールできない個人の苦しみ、経済性との葛藤をどう乗り越えるか、それを周囲がどうサポートできるかによって、創造物が社会化され文化となりうるか、が決定づけられる。



マルジェラ自身によるドローイング © 2019 Reiner Holzemer Film - RTBF - Aminata Productions

この映画では創造性に迫ろうとしながら、決して語り尽くそうとはしない訥々（とつとつ）とした本人のことばや、本人が顔を出さず手作業だけを撮った映像が想像の余地を生み出し、創造行為の意味に想いをめぐらせてしまう。二本をセットで見ることで、ファッションにおける芸術的表現とコレクションビジネスのバランスの難しさ、天賦の才能とそれを支えるチームの結び付きがさらに強く、深く感じとれるものとなっている。

ことばの迷い道

ハムりたいことばたち

岡田 真輝
京都市立芸術大学 井上隆雄写真資料アーカイブ研究 研究員

ポーランドの家族と食事中、好物を最後のお楽しみにと残していたらみんなに「何ハムってんの？」と笑われた。「ホミコヴァチ（chomikować）」、直訳すればハムスターする、という動詞である。日本語で食事中にハムるなんて形容されたら、膨らんだ頬のイメージが想起されるが、情景よりも行為に焦点を当てたことばらしい。ポケットのなかに飴を常備したり、人目を忍んで隠していたチョコを食べたり、食べ物に限らずガラクタをずっと捨てられずに収集したり。ハムスターが頬袋にせっせと餌を貯蓄することから「溜め込む」ことを示すのだそうだ。とぼけた昔話のようなからかいを、ここでは頻繁に受ける。

ポーランドの現代美術に興味のあったわたしは大学入学早々、勇んで言語の学習に取り組んだ。しかし独学でうまくいくはずもなく、あまりの難しさに6カ月も経たぬ秋口には匙を投げてしまった。大戦後、混迷を極めた時代に揉まれながら、ポーランドの芸術家たちは逆境に強かに立ち向かいユーモアとアイロニーに満ちた独特な表現を世に送り出してきた。悲劇的な歴史をもちながら、明るさと軽妙さを忘れない彼らの姿勢はどこからきているのか。歴史的背景の複雑さも相まって「難解」の二字を排して研究に向き合えず、道半ば諦めかけたとき、うっかりポーランド人と結婚してしまい再び語学学習にも引き戻されてしまった。

ワルシャワに初めて渡ったのは最良の季節、初夏。街は眩い緑と花々に彩られ、公園や家の庭には野生のリスが駆け廻り（胡桃を差し出せば素直に受け取ってくれる）、信号を待っていれば野生のハリネズミが目の前を呑気に横断した。ここは本当に一国の首都なのかと疑うほど人びとと自然との距離が近い。そして現地人たちがやたらと動物にかかわる比喩表現を多用することにも気づいた。日本語にも「馬の耳に念仏」などがあるが、これに相当する表現は「鴨の上を流れるよう（撥水性が高い羽の上を滴が流れるようにうわの空）」。他にも怪我や病気が回復したことは「（傷を犬のように）舐め終えた」とか「小スズメほど食べる（かなり少食）」「馬が笑うだろう（冗談がつまらないので笑い声に聞こえる馬の鳴き声しか反応がない＝誰も笑わない）」、お気に入りなのが「熊の恩義（ありがた迷惑）」、熊に何をされたのか非常に気になる、東欧らしい表現だ。見知らぬ者同士でも隣り合えば気軽に面白おかしくお喋りを楽しむ彼らの会話に耳をそばだて、思わずクスッとしてしまうことばたちをハムスターするのが毎度の楽しみになった。

民族意識を高めた19世紀の著名な文化人たちはしばしば、自国の文化芸術に対してポーランドおよびスラヴ人の精神性は造形芸術ではなく言語芸術に、音とことばにこそ相応しく宿るという旨の文章を残している。視覚芸術を学ぶ身としてはちょっと切なくなる言い草であるが、ポーランド人とその文化の特性を語るうえで外せないおかしく温かな人間味は、会話表現のなかにも確かに存分に見出だせる。「難解」で止まってしまっていたわたしのポーランド語に対する先入観は、彼らの陽気さに当てられ少しずつ溶け始めたかもしれない。

『月刊みんぱく』は
国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会（千里文化財団）までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893（平日9：00〜17：00）
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

月刊みんぱく　2023年2月号

第47巻第2号通巻第545号　2023年2月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発 行 人　園田直子
編集委員　三島禎子（編集長）　池谷和信　上羽陽子
岡田恵美　中川理　吉岡乾
制作・協力　公益財団法人 千里文化財団
印　　刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆油由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。

ミックス紙 FSC® C013678　VEGETABLE OIL INK　GREEN PRINTING JFPI P-810282

月刊みんぱく

2023年
2月号

編集後記

天の川のことをギリシャ語やその影響を受けたラテン語系言語では「乳の道」という。ミルキィ・ウェイの「ミルク」、ガラクシィの「ガラ」は乳を意味する。乳の道の由来はギリシャ神話のなかで、人間の肉体を不死身にする力があるとされる女神ヘーラが、恋敵の女性と夫のあいだに生まれた赤ん坊に意図せずに乳を与えたことに端を発する。この赤ん坊があまりにも強く乳を吸ったために、ヘーラは赤ん坊を突き放し、そのとき母乳が飛び散って天の川を作ったと伝えられている。

また日本の神話では、イザナギが矛を回して森羅万象の神々を生み、身体の一部からも神々が生まれた。イザナミは亡くなったが、その排泄（はいせつ）物からさまざまな神々が生まれたという。古今東西、母乳にとどまらず、身体の一部は生命を生み出す象徴として描かれているようだ。

むかしの日本で、同じ乳を飲んだ乳兄弟が疑似的な親族とみなされたように、イスラームにも乳兄弟・姉妹の結婚を禁じる教えがある。

本号の特集では、授乳はたんなる生理的な営みではないと紹介されている。そこから思わぬところに想像がおよび、生命と社会のつながりを考えることができた。（三島禎子）

次号の予告 3月号

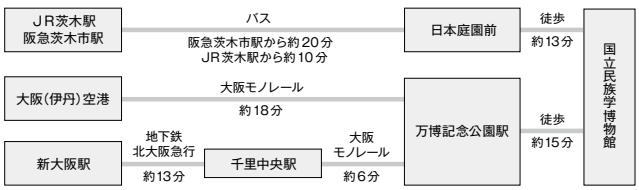
特集「記憶と抵抗——ラテンアメリカの民衆芸術」（仮）

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1　電話 06-6876-2151
開館時間　10:00〜17:00（入館は16:30まで）
休 館 日　毎週水曜日（水曜日が祝日の場合は翌日が休館日）
年末年始（12月28日〜1月4日）

主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ
https://www.minpaku.ac.jp/

国立民族学博物館（みんぱく）の広報誌

『月刊みんぱく』定期購読のご案内

1年間お届けします！

みんぱくの広報誌『月刊みんぱく』では、催しの情報のほか、世界各地の文化、衣食住の生活用具の展示、最新の民族学、文化人類学の研究について、研究者が親しみやすいエッセイやコラムで、毎月紹介しています。定期購読は年間をとおしていつでも始められます。ぜひこの機会に定期購読を始めてみませんか？

定期購読料：4,400円（発送手数料込）

※2023年4月1日から定期購読料を4,500円に改定します。
ご理解のほどよろしくお願いいたします。

ミュージアム会員もオススメ！

『月刊みんぱく』が毎月届くほか、年間何度でも本館展示をお楽しみいただけるミュージアム会員へのご登録もおすすめです。

ミュージアム会員…**5,000円**（年会費）

お問い合わせ

定期購読、友の会のご利用は、国立民族学博物館友の会（千里文化財団）までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く）　FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

国立民族学博物館友の会機関誌『季刊民族学』のご案内

A4判・104頁　2023年1月31日刊行

最新号

『季刊民族学』183号
ISBN 978-4-915606-84-7

［特集］
民藝
――人とモノとが出会うとき

今、なぜ「民藝」なのか。本特集では、民族学、民俗学、民具学などの隣接領域を横断しながら、民藝という“まなざし”の成立ちから現在までの展開を紐解く。

〈対談〉吉田 憲司×濱田 琢司／濱田 琢司
鄭 銀珍／加藤 幸治／増井 敦子／小野 絢子
鈴木 禎宏／白鳥 誠一郎／鞍田 崇

フィールドワーカーの布語り、モノがたり 第1回
バリ島の紋織と絣
――消費される手仕事の存在価値　中谷 文美
ほか

『季刊民族学』182号
ISBN 978-4-915606-83-0
［特集］
モンゴルの写真家インジナーシの世界
島村 一平／〈写真〉B. インジナーシ
〈講演〉B. インジナーシ×港 千尋×川瀬 慈×島村 一平／
〈鼎談〉B. インジナーシ×清水 哲郎×島村 一平／万城目 学

ウクライナの歴史と文化
――ロシアとのかかわりのなかで
伊東 一郎
ほか

181号　ISBN 978-4-915606-82-3
［特集］**沖縄――今に生きる記憶**

180号　ISBN 978-4-915606-80-9
［特集］**嗜好品――つくる・映える・やみつきになる**

179号　ISBN 978-4-915606-79-3
［特集］**働くことと生きること――仕事の人類学**

講読方法

『季刊民族学』は国立民族学博物館ミュージアム・ショップで販売しております。
国立民族学博物館友の会の維持会員、正会員のみなさまには、年間4冊お届けしております。
おためし購入は一般価格：2,750円（税込）、会員価格：2,200円（税込）。郵送の場合は別途発送手数料をご負担ください（会員は不要）。

お問い合わせ

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ
オンラインショップ「World Wide Bazaar」
https://www.senri-f.or.jp/shop/
E-mail shop@senri-f.or.jp

国立民族学博物館友の会（公益財団法人千里文化財団）
電話 06-6877-8893（平日9:00～17:00）
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp